

平成25年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)

実施報告書

HT25160

【プログラム名】 日本語を通して世界とICTでつながろう！



開催日：平成25年8月3日(土)※小学生
平成26年1月25日(土)※中・高校生

実施機関：明治大学
(実施場所) (京都外国語大学)

実施代表者：岸 磨貴子
(所属・職名) (国際日本学部・特任講師)

受講生：小学生 17名
中・高校生 24名

関連 URL：http://m-kishi.com/?page_id=2169

【目的】

本プログラムの目的は、情報通信技術を活用して参加者と海外の人を繋ぎ、日本語でコミュニケーションをとることで、日本語と日本人のコミュニケーションスタイルや日本文化との関連について受講生が気づくことである。

【当日のスケジュール】

午前の部は、ICTを通して外国の人とコミュニケーションをとる実習を行った。小学生の部では、「具体的な体験」を重視するため、まず、交流する国であるインドやブルキナファソ、カンボジアの文化について知るためのアクティビティを行った。具体的には、写真で人々の生活や学校の様子をみたり、各国の音楽を聴いたり、それぞれの国で使われている衣装や遊びなどを実際に体験した。これらを通して、児童らは、テレビ会議を通して知りたいこと―すなわち「問い」を持つことができた。そして、その「問い」を探究するためには、どのように質問したらいいのか、質問する際には何に気をつけたらいいのかについて、大学生を含めグループになって話し合った。高校生の部では、すでに英語などで海外とのコミュニケーションについて学習しているため、海外の人と話すための10のレッスンというタイトルのプレゼンテーションを行った。

その後、グループに分かれて実習を行った。小学校の部も中・高校生の部も、3つのグループに分かれて交流を行った。小学校の部では、インド人とブルキナファソ人、カンボジア人と交流をした。中・高校生の部では、オーストラリア人、タイ人、インド人である。各グループ20分くらいずつ交流をし、その後「うまくいった点、うまくできなかった点」についてグループで話し合い、その解決策を考えた。その解決策をもとに、再度、交流相手を変えてコミュニケーションをとった。20分間の交流を3回おこない最後に、ICTを活用して日本語で交流する際の注意点についてグループごとに発表した。

※小学生の部、中・高校生の部ともに共通

10:00-10:30 受付(京都外国語大学 同時通訳演習室 836室)

10:30-10:50 オリエンテーション(科研費の説明)

10:50-11:20 講義①「日本語教師の仕事について」

11:20-11:30 休憩

11:30-12:00 講義②「ICT活用のルール・マナーについて」

12:00-13:00 昼食

13:00-14:30 実習「ICTを活用して日本語学習者と会話」

14:30-14:40 休憩

14:40-15:10 受講者間のディスカッション

15:10-15:30 ディスカッションをもとにしたプレゼンテーション

15:30-15:45 受講者への未来博士号の授与

15:45-15:55 アンケート記入

15:55-16:00 閉会・解散

【具体的な活動・工夫】

本プログラムでは、学年の異なる児童・生徒が参加するため、次のような学年の配慮を行った。

(1) 学年の配慮: 小グループによる実習: ひとりひとりが会話に参加できるように小グループを作り、グループごとに実習を行った。グループには、大学生または大学院生がひとりつき、全員が参加できるようにファシリテートをした。これにより、全員がディスカッションに参加することができた。また、グループ発表のときも、役割をきめて、全員が発表し、自分の意見をいえるように促した。

(2) Authenticな雰囲気作り: 小学生の部では、子どもたちが交流先の国に関心を持ってもらうため、民族衣装や現地での遊びを体験するなど、インドについて感じてもらう学習活動を実施した。また、NPO法人ニランジャンスクールとの協力を得て、インド人シッター・タ・クマル氏に会場に来ていただき、児童らとの交流の場を設けた。高校生の部では、すでに英語教育を受けてきているので、本研究に関わっている大学生2名に「海外の人と話すときの10のレッスン」というタイトルでプレゼンテーションをしてもらった。また、NPO法人学習創造フォーラムとの協力を得て、シリア人ラドワン氏に会場に来てもらい、実際に高校生らと交流してもらい、海外の人と話す雰囲気を作った。

(3) 対面とICTの両方で異文化コミュニケーションを体験: ICTを通して海外の人と交流するだけではなく、実際に外国人と対面でコミュニケーションをとることで、異文化コミュニケーションの面白さと難しさを体験してもらった。具体的には、小学生の部では、児童らは京都外国語大学に留学にきているモンゴル人、イタリア人、アメリカ人、ドイツ人など複数名の留学生との交流した。高校生の部では、実際に海外の人たちと活動している大学生に多数参加してもらい、どのように海外の人とつながり、協働しているかについてポスターセッションとダイアログセッションで意見交換をしてもらった。

(4) 日本語教育に関心のある人への情報提供: 本プログラムを通して日本語教育に関心をもってくれた児童に対しては日本語学科の教員から簡単な説明と資料を提供した。

(5) 振り返り: 自ら体験し、気づける工夫: 子どもたち自身が自らの体験の中で、日本語教育や日本語での異文化コミュニケーションの面白さや難しさに気づけるように、振り返りの場を設けた。振り返りには大学生がファシリテータとなって、子どもたちの体験を支援した。その結果、子どもたち自身が、ICTを活用したコミュニケーションで気をつける点を提案することができた。

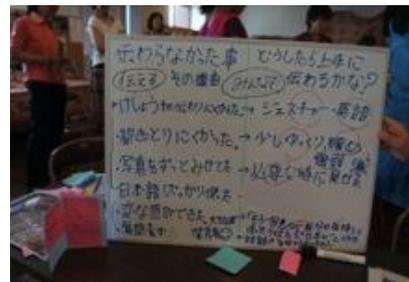
【実施の様子】



科研費や日本語教育についての講義



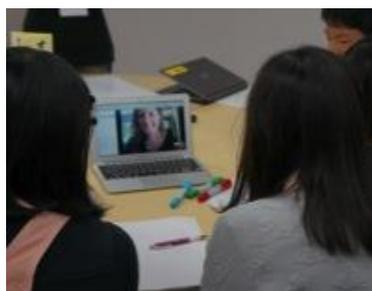
インド・ブルキナファソとの交流



実習の振り返り



海外の人と話すための10のレッスン



オーストラリアとの交流



実習の様子をiPadで振り返り

【事務局との強力体制】

本事業は、明治大学と京都外国語大学が協力して実施しました。具体的には、下記の通りである。

- ・明治大学中野キャンパス事務部中野教育研究支援事務室(以下、支援事務室)が委託費の管理と支出報告書の確認を行った。
- ・支援事務室が日本学術振興会との連絡調整、提出書類の確認・修正等を行った。
- ・京都外国語大学マルチメディア教育研究センターが、ICTを用いた実践の技術的支援や実施日の受講生対応、会場準備を行った。

【広報活動】

本事業の広報活動は、ちらし、ウェブを通して行った。大阪や京都など関西を中心として国際教育等に関心を持ち学習活動実践を行っている学校には直接連絡をとり、ちらしを送付した。また、facebook, twitter などSNSを通して幅広くウェブ上で広報を行った。

【安全配慮】

安全配慮に厳しく取り組んだ。具体的には、参加者には、保護者または学校の教員の同伴を依頼した。また、参加児童および学生ボランティアには、明治大学を通してイベント保険をかけた。また、水分補給がしっかりできるように飲み物、軽食を準備し、児童たちのコンディションが良い状態で活動できるように配慮した。

【今後の発展性、課題】

本プログラムに参加した児童は、ICTを通じた他者との異文化コミュニケーションについて考え、実践できるようになった。しかしながら、この経験を次に活かすことができない。高等教育では、ICTを活用した海外との遠隔交流が実践されているが、初等・中等教育では、ほとんどこういった実践が行われていない。このような経験を児童が活用し、経験をつむ環境づくりが求められる。

そこで、今後の発展として、2つ提案することができる。ひとつは、大学が継続的に、児童の発達段階に応じて、本プログラムのような教育実践を提供することである。一度きりの体験で終わらせるのではなく、児童が体験したことを継続的に再実践し、経験をつむ環境づくりが求められる。

ふたつめは、小学校の教員と連携し、初等教育でも実践できるためのノウハウを提案、実践の支援をすることである。小学校でもICT環境が整いつつあるため、このような実践に参加した児童が中心となって、海外とのICT交流を経験できる環境を小学校でもつくれるように、小学校の先生との連携も視野にいれるとよいだろう。

【実施分担者】

長谷川 文雄	明治大学 国際日本学部 教授
佐藤 郁	明治大学 国際日本学部 講師
柳澤 絵美	明治大学 国際日本学部 特任講師

【実施協力者】 47名 ※2日間の合計

【事務担当者】

石塚 紀子 研究推進部 研究知財事務室・事務職員